

## チャペルアワーのひと時の大きさ

著者	松見 淳子
雑誌名	チャペル週報
号	12(2013.6.24-6.28)
発行年	2013-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/11113">http://hdl.handle.net/10236/11113</a>

# チャペルアワーのひと時の大きさ

松 見 淳 子

入学式が無事終わり、新学年が始まった最初の週の火曜日、木曜日、金曜日に、私は学部長として文学部のチャペルアワーで新生に挨拶する機会をいただいた。春学期1週目の文学部のチャペルアワーは、ルスターホルツ宗教主事のご指導の下、讃美歌、聖書からの朗読、祈祷、文学部長のスピーチ、讃美歌という流れであり、チャペルは新生と参加している上級生たちを穏やかに包み込むような雰囲気であった。短い時間に何を話すのがよいだろうかと考えた末、私は二つのことを話すこととした。一つはランバス記念礼拝堂の前にある掲示板に書道部員の毛筆で定期的に内容を変えて掲示されている聖書の一節について、そしてもう一つは私の授業での学生との出会いについて。これら2つを、当日の聖書からの朗読にできるだけ結び付けて、新生にチャペルで語りかけてみたいと考えた。

初日4月9日はマタイによる福音書13章1-9節「種を播く人」、11日は同じくマタイ5章43-48章「完全な愛」、そして12日はルカ15章1-7節「見失った一匹の羊」のテーマであった。それぞれの意味を深く考えるよりも、それらに相通じることような心に沁みたエピソードを語るようにした。そして、3日間のチャペルアワーを終えた翌週の夕方、チャペルアワーに毎回参加して学部生を支えている補佐の新井さんが、新生の感想文を束にして研究室まで持って来られた。夕方のひと時、私は、全員の感想を一気に読んだ。「チャペルは初めての体験だった」、「身がひきしまる感じがした」、「身近な人に率直になろうと思った」、「自分に蒔かれた種はどのように成長していくのか、土地を耕しておきたい」、「とても心がおちついた」、「自分が何のために関学で学びたいと思ったかを改めて考えさせられた」など、どれも新鮮で率直な内容であった。入学した学生も関西学院の宝であり、「誰かに見守られていると思うことができた」と述べた学生たちに、心身ともに豊かで健康な大学生活をおくってもらいたいと願っている。

(文学部長)